関西自然保護機構会誌 25（2）：93－96, 2003

深泥池を守る会の活動とその成果
（深泥池の保全のための市民の取り組み2）

深泥池を守る会　田　末　利　治

Activities by the Society of Conservation of the Mizorogaike Pond (Citizens movements for the conservation of the Mizorogaike Pond. 2). Tosiharu Tasue (*The Society of Conservation of the Mizorogaike Pond*)

はじめに

深泥池では，深泥池団体研究グループによる団体研究と京都市委託の深泥池学術調査団による調査（初めての本格的な総合調査といわれた）が，1971年から1980年にかけて行われました。その科学的調査が終わると，調査結果から深泥池の自然の現況や解明されてきた深泥池の生い立ち，現在の深泥池がもつ自然の価値などを，京都市民は先ず新聞報道を通して知りました。その頃，深泥池の開水域では，外来の水生植物（北米原産のナガバオモダカ）が在来のジュンサイ，ヒメコウホネの分布域を占領する事態が問題となっていました。これと並行して，釣りブームで撒き餌釣りとルアー釣りをする少年や若者が大挙して池岸を囲み，水際一帯に釣り糸や釣り針，大量の雑多なゴミを散乱し，釣り糸でジュンサイの葉を切る，地下茎ごと引き抜くなど，水生植物群落が受ける被害が日常化した時期もありました。他方，さきの深泥池学術調査の後を受け，1988年には，1927年指定の「深泥池の生物群集全体に，国の天然記念物の対象が拡大されて，その名称が「深泥池生物群集」になりました。このように，深泥池の自然の学術的価値が再評価されたにも拘らず，その僅か2年後の1990年4月，京都市会建設委員会において，深泥池に沿った舗道の拡幅請願が採択されてしまいました。この事態を重視した研究者や市民が集まり，1990年6月9日，深泥池を考えるシンポジウムを開き，ここに集まった多数の市民，研究者の賛同を得て「深泥池を守る会」を結成しました。いままでに，池沿いの舗道を拡幅するようなことは起っていませんが，外来の動植物や水質などの深泥池保全課題について，行政側の対策の有無についての問いかけや交渉課題，要望をもって京都市の各行政部局との話し合いを繰り返して，現在にいたっております。

深泥池保全対策への市民参加

深泥池では，科学的な調査に基づいた保全対策が重要です。それには深泥池の学術調査に携わった研究者の協力が不可欠です。深泥池を守る会は，市民と研究者が協力して活動しています。行政も加わった三者が一緒になって，行政の施策を考える場の必要性を絶えず主張してきました。

1998年の春，「深泥池水生動物研究会への呼びかけ」（世話人 竹門康弘大阪府立大学助教授・現京都大学助教授）に接しました。この内容が，京

都市の文化財保護課の「深泥池外来魚捕獲調査事業」を，新たに結成する「深泥池水生動物研究会」に委託するというものでした。なお，この研究会の役割は魚類の捕獲を実際に行うことを伴い，大学院生，学生などのほかに，地域住民，深泥池を場としている市民グループなどの有志の参加を期待するとし，この調査を通じた住民・研究者・行政の依存関係も示されていました（表1）。

深泥池を守る会のなかからは，この研究会への積極的な評価と参加の動きがみられ，やがて一般の市民と一緒になって調査をやっていくはこびとなりました。

外来魚捕獲調査の体験から

深泥池水生動物研究会に所属する市民がグループとして始めて体験した活動のあらましを時系列に従って列記します。

1998年3月11日

漁具「えり」2統を深泥池内の2ヶ所に設置しました。この設置作業は専門家に頼みました。当日参加した約10人の市民は説明を聞いたあと，えりの設置状況を岸から見守り，本番の捕獲作業に備えることにしました。

1998年3月13日午前

この日は捕獲作業第1日にあたる。主要な作業は「つぼあげ」と捕獲魚類の計測作業でした。以下にこの2項目について詳細を述べます。「つぼあげ」はボートを利用して岸から約50m沖合にあるえりへ接近することから始まります。この作業は10時に開始しました。ボートをえりの「つぼ」とよぶ袋網（この中に魚類が集まる）に接近させ，つぼをボート内に持ち込む（つぼあげ）のです。つぼの口を開け，容器に魚類を移します。口を閉めたつぼはもとに戻す。岸で待機のメンバーに魚類の入った容器を渡します。

捕獲魚類の計測作業は次のように行いました。全員で容器の中で泳ぐ魚類を観察します。在来魚（種類）と外来魚（種類）を判別し，捕獲したそれぞれの個体数および体長，体重を計測します。外来魚のブラックバス，ブルーギル，カムルチーは，体長（被鱗長）5cm以上の個体に標識をつけて放流します。一連の作業のなかで得られる計測の結果などは所定の用紙に記録します。この作業で注意することは記録者を決めることです。後片付け，簡単な打ち合わせをいれて，1回の所要時間は約2時間でした。深泥池にいま暮らしている魚たちです。それを直に見て，サイズ，体色，顔形などから魚類を判別します。次は両手を使っての作業です。よくはねる魚ばかりを相手に，体長計測板にのせて，台秤にのせて，計測します。魚を掴む要領がなかなか大変だったようです。

3月13日午後

表1． 深泥池の魚類調査を通じた住民・研究者・行政の依存関係.

	期待される主な役割				
	資金物質調達	労働力	資料分析	結果評価	各立場のメリット
地域住民		○		○	調査経験と学習機会
研究者・学生		○	○	○	データの入手
京都市	○	○		○	労働力の確保

昼食後の午後1時から深泥池会館で第1回打ち合わせを行いました。この打ち合わせは研究会所属者には事前に予告済みでした。午前の捕獲作業全般にわたって報告し，意見交換，外来魚などの魚種に関する学習などを行いました。また1ヶ月間の予定を決め，捕獲作業（つぼあげ作業）を毎週4回（日・月・水・金）実施し，各回ごとに9時に作業を始めることにしました。各人が参加する日（曜日）を自主登録すると共に，打ち合わせ会を毎月1回，日曜日午後に開催することにしました。

その後の打ち合わせ会

現在まで継続している打ち合わせ会は，市民グループとして，その一人一人にとっても，つぼあげ作業の状況を共有するうえで大切な場です。また，研究者は，データの分析結果とその説明を絶えず行います。一人一人の体験に直結した貴重な学習の機会として期待されています。

1989年の調査が終わるまで

この調査は，えりの設置から始まったので，その年の調査を終えると，えりの撤去で終了となります。えりは3月から11月まで水の中にあります。網には水垢や微小な生物が付着して網の目を塞ぎます。その結果，水の動きが妨げられます。水垢は取り除かなければなりません。このためえり撤去作業は，漁具の管理上，どうしても欠かせません。深泥池では，捕獲作業が終了後，11月中に撤去し，水垢取りを行います。まず，えりが固定してある何本もの杭から網を取り外して，ボートに積んでその場から撤去します。えり網は岸沿いの舗道に広げ，たわしでよくこすりながら洗浄します。これには市民グループの多数が取り組みます。洗浄が終わると天日乾燥して保管することになります。外来魚捕獲調査のための作業の1年が終了したことを，市民グループのみなさんは確認します。

調査としては，3月から6月の期間は対象魚種の生息個体数推定であり，7月から11月は対象魚種の個体数の抑制です。そのために捕獲した対象魚のすべてを標本（液浸）保管する作業があります（調査結果は省略）。

日常的作業を通しての取り組み

捕獲，計測などの作業は反復作業です。誰もが体験することにより，その中から，積極的な好意や建設的な取り組みを経験してきました。1年目の活動から，その一部を紹介します。

採集具，計測器具および運搬器具の自作

プラスチック製，蓋付衣裳箱を数箱，自宅から持参し，作業の場に提供。よく動き，はねる魚たちに適する容器をと，考えたのでしょう。ボートの中では蓋付容器は必需品だけに，非常に，役立つことになりました。また，市販の巻尺を適当な長さ・幅を持った板に張り付けた体長計測板を数個自作して提供し，測定作業の効率化をはかりました。捕獲魚類の運搬用として，木造の箱船を自作し，提供しました。この箱船は全長約90 cm，幅26 cm，深さ20 cm，蓋付。つぼあげの際，魚類を入れて浮かべ，合図を交わして，船に固定した細いロープを岸から手繰り込みます。えりまでの往復回数を減らし，作業時間全体の短縮を狙ったものでした。手繰るロープ，近づく箱船，転覆せずに接岸。数分間ですが，こんな情景を見守り楽しみながらの作業が続きました。

捕獲効果をあげる対策

つぼあげの際，カムルチーの大きな硬直死体，

クサガメやウシガエルの死体，または，これらの息絶え絶えの状態の個体が，つぼの中から突然出てきた時は驚きました。この報告と同時に哀れな姿を見た計測作業中のみなさんと一緒に話をして，原因は窒息ではないか，などのやりとりの末，つぼ網の一部を水面上に出して，窒息を避けるよう配慮しました。打ち合わせ会では，別の漁具の並用を提案する機運がやってきました。作業の合間，その他の時を利用して，市民グループのみなさんが，岸から浅い水深域にブルーギルの多数の魚影を見ていたからです。数種類の漁具を試した結果，もんどりが注目され，ブルーギルの幼魚の捕獲も可能な改良型もんどりを正式に並用することになりました。いま，30個を仕掛けて捕獲効果を上げています。

深泥池における今後の外来魚対策

ブラックバスとブルーギルの現在の生息推定数からみて，まだまだ深泥池からいまの捕獲調査を緩めるわけにはいかないと思います。来春からの具体的な対策は，まず，ブラックバスとブルーギルの各産卵行動の監視を強化することです。期間は4月から7月にかけてです。産卵床の把握，産卵の有無，産卵を見付け次第，徹底した産卵床の破壊（このために監視の担当を決める）が必要です。

次は，ブルーギルの捕獲数を増加するために，もんどりの数を可能な範囲で増やすことです。これには予算を伴います。さらに，オオカナダモが開水域（南西）の全域に広がったので，えりの設置環境が悪化したと思います。そのために，えり対策が早急に必要です。

もう一点は市民グループの強化の課題です。深泥池水生生物研究会として活動が保障される市民グループのメンバー強化が大切だと思います。現在のような，ボランティアによる市民グループの活動が今後の深泥池の保全には必要だからです。この面の対応を，特に行政に切望したいところです。